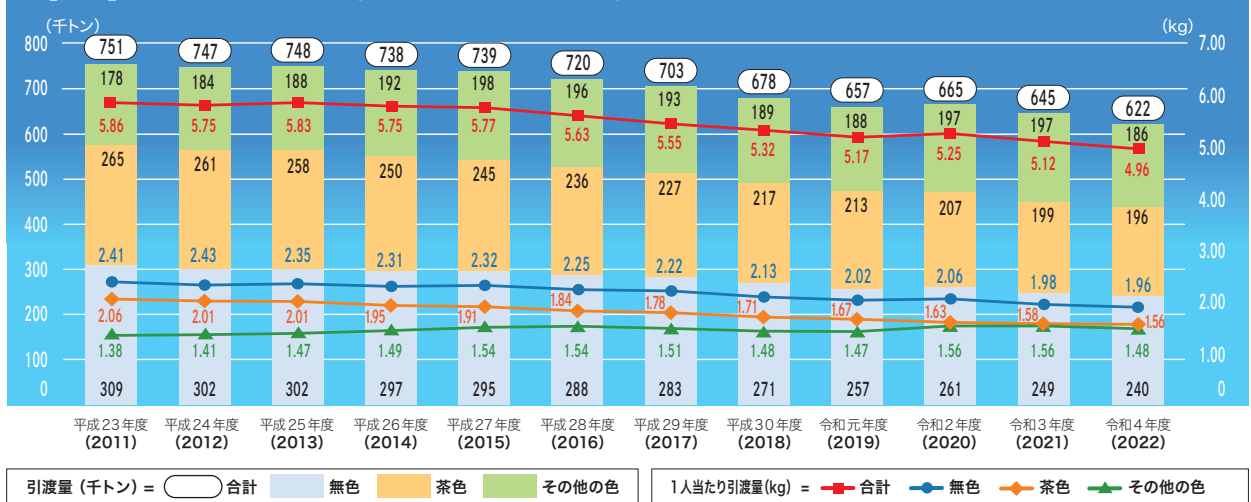


令和4年度 ガラスびん分別基準適合物引渡量分析 引渡量合計、1人当たりとも減少し、過去最低の水準

環境省が公表した「令和4年度 容器包装リサイクル法に基づく市町村の分別収集等の実績」を過去のデータや総務省の「住民基本台帳」、当協議会が2022年度に実施したガラスびんの収集・運搬方法等の全国自治体アンケート集計結果を使用して、加工分析を行いました。
分析から見えるガラスびんリサイクルの現状と課題を解説します。

【図1】色別引渡量と1人当たりの色別引渡量の推移



1人当たり引渡量が、4.96kgと初めて5kgを下回った

令和4年度の全国自治体による「ガラスびん全体」の分別基準適合物引渡量（以下、引渡量）合計は約622千トン、1人当たりの引渡量は4.96kgといずれも前年度を下回り、当実績の分析を開始した平成23年度以来最低の水準となり、1人当たり引渡量は初めて5kgを割り込みました（平成23年度比で83%の水準）。

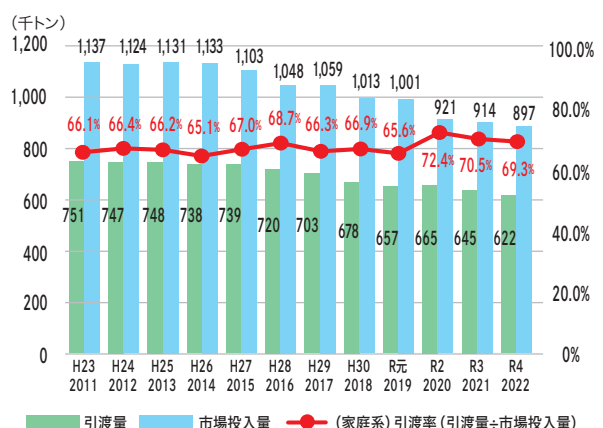
全ての色で引渡量、1人当たりの引渡量とも前年度より減少しています（図1）。要因の一つとして家庭系ワンウェイびん市場投入量の減少が挙げられます。市場投入量は令和2年度には一旦増加に転じたものの、分析開始以来概ね減少傾向にあります。令和4年度は897千トンと初めて90万トンを割り込みました（図2）。

引渡率は7割前後を維持しているが、引渡量を引き上げるほど伸びていない

引渡率は、令和2年度には72.4%と大きく伸び、その

後は低下傾向にあります。令和3年度、令和4年度も7割前後と令和元年度以前を上回っているものの、引渡量を引き上げるほどではありません（図2）。市場投入量が減少傾向にある中で引渡量を増やすには、引渡率を上げる必要があり、単純計算では平成23年度並みの引渡率75.1%に戻すには、10ポイント以上高い約84%に引き上げることが必要となります。

【図2】1人当たりガラスびんの引渡率、市場投入量、引渡率の推移

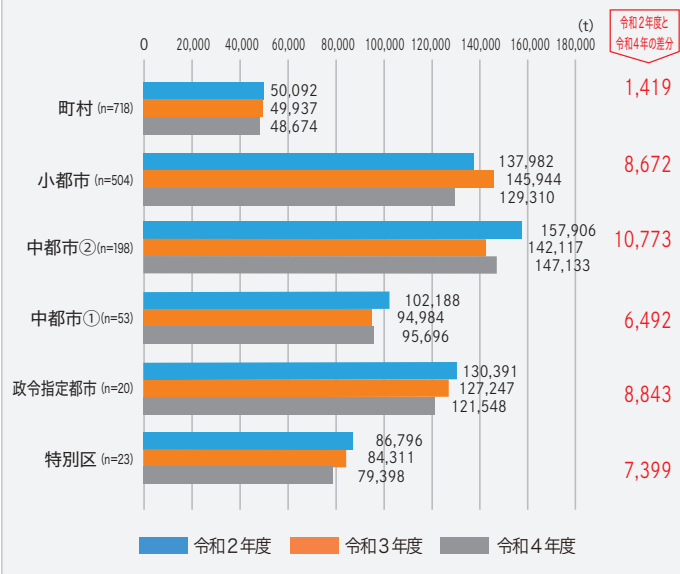


クロス分析で読み解く、ガラスびんリサイクルの現状と課題

引渡量は人口集中エリアでの
落ち込みが大きい

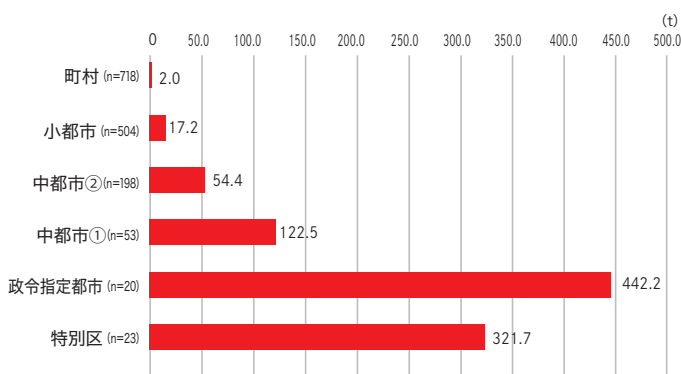
図3は自治体規模別の引渡量をみたものです。全ての規模の自治体で令和4年度は令和2年度に比べ引渡量が減少しています。

【図3】自治体規模別に見た引渡量の推移



自治体数による差を排除するため令和2年度と令和4年度の差分を令和4年度の自治体数で除した数値をグラフ化したものが図4です。1自治体あたりで見ると、政令指定都市、特別区などの人口の多い自治体で特に減少が大きくなっています。

【図4】自治体規模別の令和2年度と令和4年度の引渡量の差分



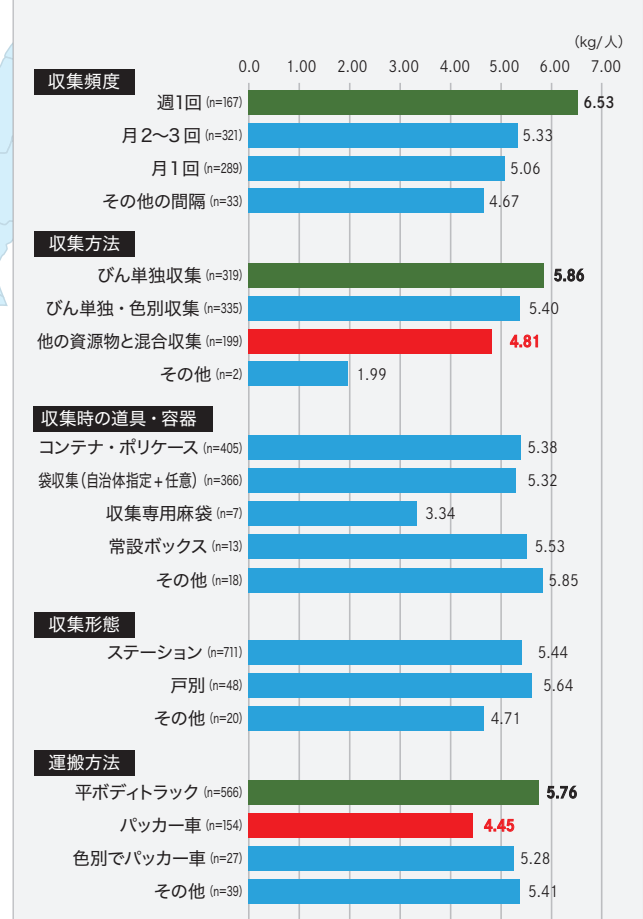
運搬方法によって1人当たり引渡量大きな差が出る

ガラスびん3R促進協議会が2023年3月に実施した2022年度自治体アンケート結果を用いて、自治体別の1人当たりの引渡량とのクロス分析を行いました。アンケートは全国1,741自治体に送付し、回答自治体は1,064で回答率は61.1%、人口ベースでは81.5%でした。

アンケート内容は、①空きびんの収集頻度、②空きびんの収集方法、③収集時の道具、容器、④収集形態、⑤収集時の運搬方法、⑥キャップについての住民への広報、⑦食器・陶磁器類の収集の7問です。

※全体の回答は1,064自治体だが、質問によっては無回答や複数の選択肢を回答している自治体もあるため、1人当たりの引渡量との関係を見る際には、各質問において一つの選択肢のみに回答をしている自治体のみを取り上げて集計・分析を行った。

【図5】アンケート回答別の1人当たり引渡量の平均





アンケート項目の中で、1人当たりの引渡量の平均値に影響を与える要素を見ると、収集頻度で「週1回」※、収集方法で「びん単独収集」、運搬方法で「平ボディトラック」が引渡量の向上に影響がある可能性が高くなっています。(図5)。一方、運搬方法で「パッカー車」、収集方法で「他の資源物と混合収集」は引渡量を減少させている可能性があります。

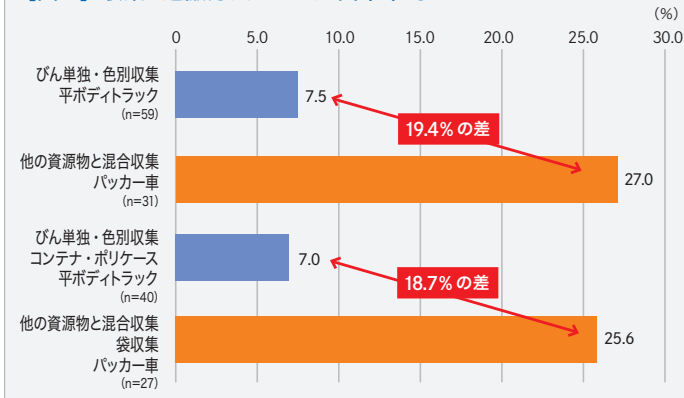
※収集頻度と収集量の関係は、家庭からの排出量が多いため収集頻度が高くなっているという可能性があり、収集頻度を上げることが引渡量を増やすとは言い切れない。

人口が多いほど引渡も多い傾向がありますが、一部政令指定都市では人口規模の割に引渡量が少なくなっており、収集・選別方法で「他の資源物と混合収集」「パッカー車」比率が高いなどの要因があると思われます。

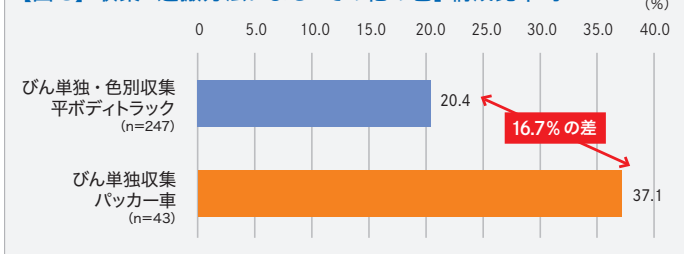
ガラスびんリサイクルの効率・効果向上に向けて

1人当たり引渡、差異率※、「無色」・「茶色」から「その他の色」への混入、いずれにおいても収集・運搬方法で「他の資源物と混合収集」、「パッカー車」など収集・運搬時に「混ざる」「びんを破碎する」方法は悪影響を与える可能性が高くなっています(図6、図7、図8)。逆に、「びん単独・色別収集」「平ボディトラック」は色別に収集したものを混ぜず、破碎せずに運搬することで差異率の向上、「その他の色」への混入を防ぐと考えられます。

【図7】収集・運搬方法による差異率平均



【図8】収集・運搬方法による「その他の色」構成比平均



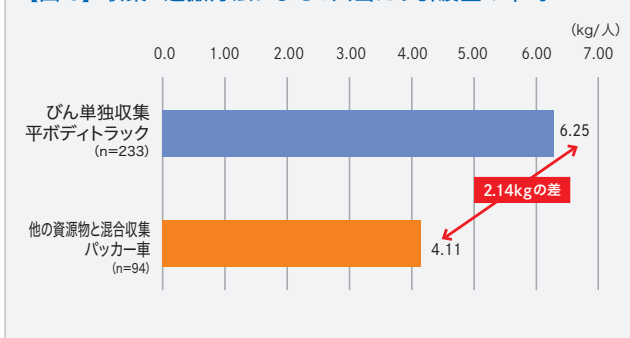
一方で、色別に収集するには、生活者の方のご協力が不可欠であり、空きびんを資源として活用するために色別に排出することの重要性を理解していただくことが重要です。ガラスびん3R促進協議会では、生活者の方への啓発用の資料をWebサイト等でご用意しておりますので是非ご利用ください。

※分別収集量から引渡量を減じ、分別収集量で除し100倍した値 [差異率=(分別収集量-引渡量)÷分別収集量×100] で、分別収集量のうち分別基準適合物として引き渡せなかった割合を表したもの

より詳細な分析結果は当協議会Webサイトよりダウンロードいただけます。こちらも是非ご利用ください。



【図6】収集・運搬方法による1人当たり引渡量の平均



(注) 容器包装リサイクル法に基づく市町村の分別収集等の実績(環境省)

市町村は、容器包装リサイクル法に基づき、以下の容器包装廃棄物を対象に分別収集計画を定めています。

詳細は環境省HPを参照。

- [1] 無色のガラス製容器 [2] 茶色のガラス製容器 [3] その他の色のガラス製容器 [4] 紙製容器包装 [9] 及び [10] を除く
- [5] ペットボトル [6] ペットボトル以外のプラスチック製容器包装
- [7] スチール製容器 [8] アルミ製容器 [9] 段ボール製容器 [10] 飲料用紙製容器

本報告書では、上記のうち、ガラス製容器に関するデータに、住民基本台帳(総務省)のデータおよび当協議会が独自に調べたデータを加味して分析をおこなっています。

2024年6月2日

**第28回通常総会を開催。
新役員の選出と全議案が承認されました**

日本ガラス工業センター会議室において、第28回通常総会が実地とオンラインのハイブリッドで開催しました。

2023年度事業報告書(案)・収支報告書(案)、役員選任・変更、2024年度事業計画書(案)・収支予算書(案)の議案が審議され、全議案とも可決、承認されました。

2024年6月13日

**容器包装の3Rと普及啓発に関する
自治体向け情報交換会開催**

3R推進団体連絡会は、自治体担当者向けの情報交換会を実地とオンラインで開催しました。

当日は8市区から13名が参加し、3R推進団体連絡会を構成する8団体*から容器包装の3Rと市況等に関する最新情報を提供の後、普及啓発についての情報交換を行いました。



*: ガラスびん3R促進協議会、PETボトルリサイクル推進協議会、紙製容器包装リサイクル推進協議会、プラスチック容器包装リサイクル推進協議会、スチール缶リサイクル協会、アルミ缶リサイクル協会、飲料用紙容器リサイクル協議会、段ボールリサイクル協議会

2024年6月27日

統一規格びん推進委員会準備会合開催

統一規格びん推進委員会設立の準備会合が開催されました。

昨年度からステークホルダーによる「規格統一びん(720ml)に関する意見交換会」で、製びんメーカーの工場閉鎖と生産規模縮小で新びんの需給ミスマッチが発生する中、多くのびん種が流通しワンウェイびんが主流である清酒中小びん(720ml)の規格を統一し、新びんと回収びんでの需給対応を模索してきました。準備会合では委員会の進め方と検討内容、委員長選定、事務局及び運営体制について討議し、決定しました。

なお、第1回統一規格びん推進委員会は9月27日に開催される予定です。

2024年7月2日

事業計画記者説明会を開催

「2024年度事業計画記者説明会」を日本ガラスびん協会との共催で開催しました。当日は11社、13名の記者にお集まりいただき、当協議会からは2024年度事業計画、2023年ガラスびん軽量化実績、令和4年度市町村別分別基準適合物引渡量の分析結果、2023年度全国自治体ガラスびん収集方法のアンケート集計結果などを説明しました。



**1.8L 壺利用及び回収に関する調査
(2022年度実績) 集計結果概要を公表**

1.8L壺再利用事業者協議会は容器包装リサイクル法第18条で定める自主回収認定容器である、丸正1.8L壺の自主回収の状況(出荷量ならびに回収量)の調査集計結果を基に自主回収状況報告書を作成し、6月25日に国税庁に提出し、収受されました。

2023(令和5)年度の出荷量は73,280千本(69,616トン)、回収量は54,147千本(51,440トン)であり、回収率は前年度から3.4ポイント改善し、73.9%でした。改善の要因はP箱出荷比率の増加、新壺購入比率の減少によるものと推察されます。調査集計結果の概要はリターナブルびんナビで公表しています。

詳しくは、リターナブルびん専門ポータルサイト「リターナブルびんポータルサイト」をご覧ください。

